



挑戦・仲間

見方と考え方の転換について

NHK 総合『所さん！事件ですよ』は好きな番組のひとつです。9月19日(土)に放送された内容をまとめてみました。

1 米国などで起きている「AI とブルーカラーの逆襲」の構図

これまで「高収入・安泰」の象徴だったホワイトカラー(デスクワーク職)の価値が、生成AIの急激な進化によって揺らいでいます。

〇AIに代替されない「物理的スキル」の強み

生成AIは、文章作成やプログラミング、データ分析、法律や財務の書類作成など「画面の中で完結する知的作業」を驚異的なスピードで行います。そのため、一部のデスクワークは需要が減り、給料低下の圧力に晒されています。一方で、エレベーターの修理や水道の配管、電気工事のような仕事は「現場の状況を目で見極め、手先を使って物理的に直す」必要があり、現在のAIやロボットでは代替が不可能です。

〇人手不足による給料の大幅な上昇

米国では、現場の熟練技術者が引退する一方で、若者のブルーカラー離れが長年続き、深刻な人手不足に陥っています。その結果「AIにはできない仕事」を持った技術者の価値が上がり、独立して億単位の資産を築く「ミリオンダラー・ブルーカラー」と呼ばれる若者が続出しています。

2 職業訓練校に殺到する「ホワイトカラー女性」の転職事情

日本国内でも企業の事務職や営業職、クリエイティブ職などのデスクワークから現場の技術職へシフトする女性たちが急増しています。

〇「自分の手で生み出す」手応えへの切望

密着取材された女性たちは「毎日パソコンの画面に向かってデータを処理したり、SNSの管理をしたりする仕事」に虚しさを感じていました。成果が見えにくく、自分の代わりはいくらでもいる

のではないかと不安から「自分の手で形を作り、成果が目に見えて残る仕事がしたい」と職業訓練校で技術を学び始めています。

〇学び直しとしての人気

国や自治体の支援制度が充実したことも後押ししています。未経験からでも家具製作や電気工事、塗装、リフォームといった専門技術を基礎から体系的に学ぶため、セカンドキャリアとして本気で「職人」を目指す女性たちが多く存在しています。

3 建設業界の「多能工(たのうこう)」の仕組み

日本の建設業界は、長年、大工は木工事だけ、塗装屋はペンキ塗りだけ、配管工は水道だけ…というように、1人の職人が1つの専門分野だけを担当する「単能工(たんのうこう)」の分業制が基本でした。これを覆^{くつがえ}したのが「多能工」です。

〇1人で何役もこなすマルチスキル

多能工とは、1人の職人が「大工仕事も電気工事でも内装のクロス貼りも、水道の配管もできる」というように、複数の異なる専門技術を身に付けた技術者のことです。

〇業界の構造改革と生産性の向上

従来の分業制では、前の工程が終わらないと次の工程の職人が作業できず、スケジュール調整や現場の待ち時間が多く発生していました。また、下請けや孫請けが重なることで職人の給料が減る構造もありました。

地域の建設会社などが進める「多能工の育成」によって1人の職人が一連の工程を連続して行うため、工期が劇的に短縮されます。待ち時間がなくなり生産性が上がるため、会社全体の利益が増え、結果として職人たちの給料や休日(働き方改革)として還元できるという画期的な仕組みです。

これからの社会での「生き方と働き方、仕事とやりがい」を考える時間でした。